

無料

ご自由にお持ち
帰り下さい

平和で豊かな沖縄県を目指す情報誌

沖縄協会だより

2021.3

No.19



平和の絵―「戦争と平和」

20点連作―第11作

西村計雄 作

かーみぬくーばか(亀甲墓)

300号

176×303×6.5cm

沖縄平和祈念堂
所蔵絵画紹介

〈制作意図〉

ことのほか先祖を敬愛する沖縄の人びとにとって最も心の平安を得る場所、それは墓所なのである。先祖の霊が鎮まる墓屋敷から常にその子孫をやさしく見守り、励ましてくれると信じている。人びとは、この墓屋敷を生活の最後の砦、安住の場所としており、たとえ家屋敷を売り払っても護り、アカ花(仏桑華)で周囲をかこい、最も大切にしている。去る沖縄戦では人びとの唯一の安全な避難場所となり、幾多の尊い生命を救ったのが墓屋敷であった。清明の季節(旧暦3月)には門中(親戚一門)や知人が墓屋敷に集まり、賑やかに先祖を祀り、楽しく半日を過ごす。俗説によればこの亀甲墓は、母の胎内を象徴しているとも伝えられるが、作者は死者の(亡き夫人を含め)への鎮魂と安らかな眠りを祈る想いがこめられ夫人の顔も添えてある。
昭和57年6月3日寄贈

西村計雄(明治42年・北海道生まれ)

東京美術学校卒、藤島武二に師事。1943年文展(現・日展)特選。戦後早稲田中学校と高等学校の教師を勤め、51年に42歳で単身渡仏する。ピカソの画商カーンワイラー氏との出会いを契機に、53年よりパリを中心にヨーロッパ各地で個展を開催。その作品は、フランス国立近代美術館やパリ市美術館に買い上げとなった。フランス芸術文化勲章、パリ・フリティック賞、勲三等瑞宝章他受賞多数。共和町立西村計雄記念美術館開館。2000年12月4日没。

沖縄協会は、沖縄が本土に復帰するまでの間、各種の援護活動を行った特殊法人南方同胞援護会(昭和31年～47年5月)の後を受けて、昭和47年9月20日に設置された内閣府所管の公益法人です。新たに設立した財団法人沖縄協会は、南方同胞援護会の実績と経験を活用して、沖縄の振興施策に積極的に協力し、平和で豊かな沖縄県の建設に寄与してまいりました。平成23年(2011)4月1日、沖縄協会は内閣総理大臣より公益財団法人として認定を受けて「公益財団法人沖縄協会」として新たな一歩を踏み出しました。これからも、沖縄県の健全な発展と幸福な社会形成に役立つ事業を行いながら、沖縄平和祈念堂を管理運営することで、平和で豊かな沖縄県の建設に貢献していきます。

公益財団法人 沖縄協会

第42回 沖縄研究奨励賞 受賞者研究題目の要旨とこれからの抱負

沖縄協会は令和3年1月20日「第42回沖縄研究奨励賞贈呈式」を開催した。今回受賞した自然科学部門のマンガー病害グループ(代表者・澤岬哲也)、人文科学部門の麻生伸一、沖縄県立芸術大学全学教育センター准教授、社会科学部門の小原満春、沖縄県立那覇商業高等学校教諭に、野村一成会長代理の上原良幸副会長から本賞(賞状)と副賞が贈呈された。今回、受賞の対象になった研究題目の要旨とこれからの抱負を紹介する。



受賞者紹介(右より) 小原満春氏、麻生伸一氏、澤岬哲也氏(グループ代表)

沖縄産マンガーに発生
する炭疽病と軸腐病の
発生生態の解明および
防除技術に関する研究

マンガー病害グループ

代表者 澤岬 哲也

安次富 厚

大城 篤

新崎千江美

與儀喜代政

マンガーは沖縄県の重要な熱帯果樹のひとつで、ビニールハウスを利用した高品質果実の生産技術が定着した結果、現在は生産量が全国1位を占めるなど高級果実として認知されている。その一方で、県内から出荷されるマンガー果実で、たびたび炭疽病と軸腐病が発生し問題となっている。主な病原菌はいずれも糸状菌で、炭疽病は果皮の黒い斑点症状、軸腐病は果肉の軟腐症状を引き起こす。収穫時の果皮はきれいであっても、輸送中に果実が熟してくると発症して、市

場あるいは消費者に届いてから腐敗が確認されることがほとんどである。そのため、商品価値の低下のみならず、沖縄産マンガーのブランド価値を著しく損ねる原因となっており、防除対策による品質の安定化が本県の重要な課題となっている。しかし、これら病害の発生生態は不明な点が多く、圃場の効果的な防除法はこれまで確立されていなかった。そこで、マンガーを栽培しているハウス内で、病原菌がいつどの部位に感染しているか、また、伝染源となる胞子の飛散状況等を調査した。その結果、病原菌は流通過程で果実に感染するのではなく、花芽や幼果の段階で既に潜伏して感染していることを確認し、この生長的知見をもとに病原菌に対して効果的な殺菌剤を選定することで、複数の有効薬剤を用いたローテーション散布による体系防除技術を確立した。また、病原菌のハウス内の伝染源として枯れ枝等の剪定

残渣が関与することを明らかにし、これら病害に対してハウスの残渣除去による耕種的防除が有効であることを明らかにした。さらに、沖縄県農業研究センター(名護支所)で進めているマンガーの病害抵抗性品種の育成において、簡易で正確な炭疽病の病原性検定法を確立した。この画期的な検定法により、マンガー遺伝資源の炭疽病抵抗性を評価し、本病に強い育種素材を1品種選定することに成功した。選定した抵抗性品種を育種素材として活用することによって、世界初の炭疽病抵抗性マンガー品種育成の可能性が示された。以上の耕種的、化学的および物理的側面から両病害に対する効果的な総合的防除体系を確立した。これらの成果は、県内の生産農家と各指導機関を中心にパンフレット、栽培マニュアル(JAおきなわ発行)の配布および講習会等で精力的に情報を提供し、本県全域のマンガー生産現場において、両病害に対する有効な防除暦モデルとして普及している。沖縄県の植物防疫上の応用面だけでなく、沖縄産マンガーの品質向上に大きく貢献している。

近世琉球政治社会史の研究

沖縄県立芸術大学全学教育

センター准教授

麻生 伸一

私はこれまで近世琉球の政治社会史の研究に取り組んできた。なかでも興味関心は、明清中国の朝貢国である一方、薩摩藩の支配も受けていた首里王府が、どのように自らの権威性（琉球王権）を維持・発揚していたのかを考えることにある。この課題は、首里王府の外交と内政双方に関わる。そこで、琉日間あるいは琉中間に展開した外交交渉および政治慣行や儀礼行為、首里王府の政策決定過程を分析してきた。以下、関連する研究をいくつか紹介したい。政治慣行や儀礼行為については、近世日本でおこなわれていた儀礼の琉球への導入・対応を取り上げた研究がある。具体的には、国王が薩摩藩主に反逆しないことなどを神仏に誓約する「起請文（きしょうもん）」の作成や薩摩藩主の鷹狩りで得られた鶴（御鷹之鶴）（おたかのつる）の拝領に関する儀礼を検討した。「起請文」の作成に当たっては薩摩藩主への従属

性を示す国王の儀礼行為が段階的に削減されたこと、「御鷹之鶴」関連儀礼では、近世日本でおこなわれていた儀礼を琉球王権の強化に援用していたことなどを指摘した。首里王府の政策決定過程については、一九世紀に展開した先王祭祀再編を取り扱った研究がある。この研究を通して分かったのは、政策の最終決定権は国王が持っていたが、国王の年齢や審議内容によっては国王の意図がかならずしも優先されなかったことである。王府は、国王の判断だけでなく王府内で統一した合意形成を作っていく過程も重視していたといえよう。また、先王祭祀は、中国的あるいは儒教的な先例や原理に琉球の先例を組み合わせたかたちで再編された。当時の王府役人の言を借りれば「琉球ではすべて中国の作法通りにはおこなうことはできないので、琉球古来の作法に基づいて中国の格式にも倣えば万全の対応になるのではないか」（「僉議」意識）という発想である。王府は、琉球の事情に合わせて参考になる事例を外から取り入れていたといえる。これらの研究を通して

近世琉球を捉え直した場合、首里王府は近世日本と明

清中国の権威性や支配論理の影響を受けながらも、それらを琉球王権にとって有効に活用できるように二部改変しつつ内面化していたといえる。今後は、このような従属性だけでは説明できない琉球王権の特質の追求についての研究を深めていきたい。

沖縄県における観光経験とライフスタイル移住の関係に関する研究

沖縄県立那覇商業高等学校・教諭

小原 満春

沖縄には毎年多くの観光者が訪れ、その中には沖縄に強く魅了され移住を行う人もいます。そのような人々が、いかにして沖縄に魅了されていくのか、その心を解き明かすことで、沖縄という場所の本質的な魅力に迫ることができると考えました。そこで、私は沖縄に魅了された観光者と移住者の両者を研究対象とし研究を行ってきました。観光の延長線上のような長期滞在や移住は、いわゆる移民のように経済的な理由ではなく、理想のライフスタイルを求めた移住

であり、このような移住形態を「ライフスタイル移住」といいます。そこで、沖縄へライフスタイル移住をした移住者に聞き取り調査をしたところ、次のような過程を経ることがわかりました。初訪問のきっかけは多様ですが、その時の経験が強く印象に残ることで、再び沖縄へ訪れるリピーターとなります。そして再訪問を繰り返すことで、沖縄での生活にあこがれを抱き、同時に日常の生活に不満を持つようになります。そのことから、沖縄移住を強く意識するようになり、沖縄での仕事が決まることで、移住を決意するという過程が明らかになりました。さらに、沖縄への移住希望者（潜在的移住者）にもこの過程が当てはまるのか、定量調査および統計的な分析を行いました。その結果、移住希望者は、沖縄で自己の成長を感じようという経験を行うことで、沖縄が自己のアイデンティティの一部となる「同一化」が形成され、この沖縄との同一化が、ライフスタイル移住の意図形成に強く影響を与えることが明らかになりました。一方、沖縄の自然を満喫するといった、いわゆる一般的な観光経験については、再訪問との関連はあ

るものの、ライフスタイル移住の意図形成には影響を与えないことも明らかにしました。つまり、一般的な観光経験では、ライフスタイル移住を行うことにはないということです。よって、沖縄での観光経験において、長期滞在や移住につながるいくつかの経験と、つながらない経験が存在するということが明らかにされました。以上が本賞を受賞させていただいた研究の概要になります。沖縄には魅力的な観光資源が多く存在し、またそれを求め多くの人々が観光で訪れます。訪れる人々について、今後も観光行動の側面から研究し、沖縄観光の発展に微力ながら貢献していきたいと考えています。

感染防止対策徹底宣言



沖縄平和記念堂では、沖縄県が作成した「新型コロナウイルス感染症感染防止対策チェックシート」を実施し、「感染防止徹底対策宣言ステッカー」を取得しています。

★摩文仁・火と鐘のまつりの
小セレモニー

本年度も大晦日に開催を予定していた「摩文仁・火と鐘のまつり」は、今般のコロナ禍を鑑み、毎年訪れる多くの参加者・ボランティアの皆さんの安全第一を考え、まつりのメインは中止としたが、大晦日の午後には当協会役員と職員でまつりに代わる小規模のセレモニーを行った。プログラムは、平和の礎に灯された平和の火をまつりの聖火として沖縄平和祈念像に献納し、まつり誓いの言葉、戦没者慰霊と恒久平和を祈念して黙祷を捧げた。続いて、堂宇前庭の聖火台に聖火を点火して平和の鐘の献鐘を行い、鐘の音が霊域摩文仁に鳴り響くなかセレモニーを終えた。堂内前室では、まつりの雰囲気を感じても感じてもらうとこれまで開催したまつりのおうすを写真で紹介した。また、同様に中止した三つの慰霊・平和祈念行事も紹介した。

★ホース&シープ琉球芸能
公演の動画撮影

2月20日、琉球芸能をとおして出逢った午年・未年生まれの高校3年生の7人組・ホース&シープに

よる「ホース&シープ琉球芸能公演」の動画撮影が沖縄平和祈念堂で行われた。この公演は当初劇場で開催を予定していたが、今般のコロナ禍により中止を検討するなか、公演プログラムを平和祈念像の正面で演じ、その動画を撮影・編集してインターネット上で配信する計画に改められた。出演者は、新型コロナウイルスでお亡くなりになられた方々のご冥福と世界の恒久平和を祈念して撮影に臨んだ。



★沖縄協会資料室蔵書について

当協会は、沖縄平和祈念堂管理事務所2階に設置した沖縄協会資料室蔵書の整理や閲覧に関するリニュアルを終えた。資料室蔵書は当協会の前身で、沖縄が本土に復帰するまでの間、各種の援護活動を行った特殊法人南方同胞援護会(昭和31年〜47年5月)が収集した書籍や現在に至るまでの図書類が収蔵されている。中には大正・昭和初期からの貴重な書籍もある。閲覧しやすくなった資料室蔵書を多くの方々を活用して頂きたい。

協会関係事業他
募集案内など★沖縄青少年勉学支援制度
について

この制度は、本土沖縄県以外の都道府県で働きながら学ぶ沖縄青少年を支援し奨励するため、1973年に設置された。この制度に賛同いただいた沖縄出身者を含め多くの方々からの温かい寄附金でつくられた「働きながら学ぶ沖縄青少年支援基金」の運用により勉学支援金を給付し、これまで延べ1148人の働きながら学ぶ青少年が支援を受け、習得した資格や技術を活かしてそれぞれの進路を歩んでいる。

2021年度の応募は、4月1日〜6月30日まで。当日消印有効。

★沖縄平和祈念堂
改修工事に伴う
ご寄付のお願い

開堂から43年を迎える沖縄平和祈念堂では、現在、経年劣化による改修工事を頻繁に実施しております。今後、さらに工事の必要が考えられますので、多くの皆様に諸経費に対するご寄付を賜りますようお願い申し上げます。

※詳細は「公益財団法人沖縄協会のホームページより」



沖縄平和祈念堂美術館

沖縄出身画家 紹介 ⑧

玉那覇正吉 (大正7年・沖縄県生)

東京美術学校卒。春陽展入選、春陽会会員、琉球政府文化財専門委員、沖縄展運営委員、琉球大学美術工芸科教授。昭和59年没。

制作意図

陸揚げされた船体、そのたつきを終わってのことか。海にあるより尚、その生命を思う。

玉那覇 正吉 作 白い船体のある風景 P50

